

ナナ、私だけの犬駅長

近頃はやたらと動物駅長が流行っているみたいだ。奥武線の駅では色々なところに「ひのえまたの犬駅長ペロ」なんてポスターが貼られていて真っ黒な顔からピンクの舌をペロッと出したペロの写真が愛嬌を振り撒いているけれど(よほど上岩線の利用が少なくて利用促進目的なのだろう…)、そんな遠くまで行かなくても、私の最寄り駅にはれっきとした自慢の犬駅長がいるのだ！というのは、奥武線から切符販売を任されている駅前のタバコ屋さんのおばあちゃんが飼っている雌犬のナナ。もちろん奥武鉄道の公認ペット…いや駅長ではない。だからペロのように帽子をかぶらされるなんてこともない。

塩ノ沢温泉、なんていういかにも観光地のような名前のついた駅が私の最寄りだ。いつだったか私は通学の列車に掲げられている奥武線の路線図をいつまでもとなく見つめていたことがある。塩ノ沢温泉、熱塩温泉、そして小豆温泉。奥武線には温泉と名の付く駅が3つある。あと2つの「温泉」駅はどのような雰囲気のところなのだろう。少なくとも私の最寄り駅「塩ノ沢温泉」は私の知る限り温泉客らしきお客の一人も見ることがない。以前不思議に思って母に聞いたところ、国道から山奥に入ったところに一軒の温泉宿があるらしいのだが、国道近くにある駅には昔貨物列車が走っていた名残で小さな列車しか来ない割に構内が広くとられている以外にこれといった特徴はない。

常陸大宮の県立高校に通うには、朝6時24分の常陸大子行き一番列車に乗らないといけない。本来ならその次の7時02分発奥袋田行きで常陸大子まで行くと乗り継げる水郡線の列車があったのだが、1年前の台風以来水郡線が不通でバス輸送になっている関係で代行バスの常陸大子発時刻が列車時代よりも早まってしまった。7時09分に常陸大子に着く奥武線の列車から7時10分駅前発になってしまった代行バスに乗り継ぐわけにもいかず、1本早い列車に乗らなければならなくなってしまったのだ。

小さな、本当に小さな「温泉」駅。朝6時過ぎの駅前に誰がいるわけもなく、私は毎朝少し早く家を出ては、駅前でしばしナナと戯れてから列車に乗るのが日課になっていた。私が物心ついたころからここで行き交う人々に尻尾を振って来た真っ白な雑種のナナはもう結構な歳だ。昔は私の姿が見えるとちんちんして出迎えたものだが、今は私が通りかかると軽く「ワフツ」と喉を鳴らしてごろりと横たわる。すでに真っ白とは言い難くちょっとボロ雑巾のようになったお腹を撫でてあげているとナナは決まって首を伸ばし薄目を開けて気持ちよさそうに歯茎の脇から赤い舌を出すのだ。肉球のぷにぷにした前足を無防備に折りたたく。その仕草を見ていると私はいつも、「絶対に奥武鉄道公認のペロちゃんよりうちのナナの方が上ね！」と一人嬉しくなって、終いに小さな駅舎の向こうから聞こえてくる列車接近のアナウンスを聞きながら、ナナに手を振る。瞬間起き上がって目をパチクリとさせるナナ。「え？もう行っちゃうの？」とでも言うように。

「インフルエンザも流行り出すから、みんなくれぐれも帰ったら手洗いとうがいを！体調管理が大事だぞ。」「はい。」「毎日終礼で同じことを繰り返されるのにもいささかうんざりしてはいるが、今日はいつもとちょっと違った。」「あ、阪元、ちょっと教員室来いや。良い話だ！」

「お先に失礼しまーす！」若い先生たちが私服に着替えて出て来る教員室の奥の談話室に通された私は緊張で硬くなっていた。すると担任の西谷が何やら資料を持ってすぐに入って来た。「阪元な、お前この間のスピーチ大会も良かったな！中間試験も頑張っていたしな。それでだ、実は大田原にある病院から事務の募集が来ていて、俺としては是非阪元を推薦したいと思うんだけど、この話どうだろう。」特にえこひいきしているという風ではないが、担任の西谷は毎朝毎夕ひとときわ遠方から通って来ている私をいつも気にかけてくれている風があった。私が資料に目

りは朝の列車も少しだけ遅くなるし良いかな。あ、でもナナと遊ぶなら結局同じ時刻に家を出ようかな…。

面接は卒なく終わったように見えた。大田原駅を11時半に出ると七合の乗り換えで46分も待たされて塩ノ沢温泉に戻るの13時07分だ。大子線は乗り換え拠点の七合から那珂川町の市街地がある馬頭までは本数が比較的多いが、馬頭から県境を越えて茨城側に入って来る列車が少ない。昼過ぎの駅に降り立つと、駅正面のタバコ屋の脇の薄暗がり、犬小屋からびっくり眼で見つめているナナ。「え？もう帰って来たのかい？」「今日は学校じゃないのよ。ナナ、驚かせてごめんね！」私はスーツながらに緊張もほどけて思い切りナナを撫でまわした。スカートだけじゃなくてジャケットにも白いふわふわの毛が絡み、帰ってから母に「あなた、面接に行ってきたの？動物園にでも行ってきたの？」と呆れられたものである。

3、4週の間季節は回り、木々も葉を落とし刈り入れを終えた田は一層凜と冷たい空っ風の中に温かな土色を見せていた。「今年は寒そうだから袋田の滝も例年より早く氷瀑が見られるなんて言うぞ。まあ、今年はこれじゃ観光も何もないがな。」町の役場に勤める父が出勤がてら、車のエンジンを入れながら背を見せてぼつりと言った。「お前の高校生活もあと少しだな。どうだ、就職したら運転免許取るんだろ？」そうだ。この土地の若者は大概が就職、大学進学と同時に車を持ち、鉄道に別れを告げる。でもそうしたら幼稚園の頃から親しんできたナナとの毎朝はどうなるの？私にはまだ車での出勤という絵が浮かんでいなかった。幸いこれまでも駅から歩いてすぐのところにある私の家からの列車通学は苦ではなかった。

この日もタバコ屋の前を通ると、あれ？ナナが出てきていない。犬小屋を覗くとまだ丸まって寝ているではないか。「ナナ、おはよう。学校行ってくるね。」そう言うとハッと思い出したのか、じゃりじゃりと鎖の音を立て、ナナが近づいてきた。そしていつも通りくんとにおいを嗅いで、ごろんと横に。「ナナ今日はお腹があたたかいね。まだ寝ていたんだね、ごめんね。」

「阪元、昼休みちょっとだけ教員室な、良い話だ！」午前の授業が終わると、担当の西谷はまた小さな声で私を教員室へこまねいた。先日の面接試験で合格をもらえたという話だった。春からの就職先が決まって私は安堵の息をした。両親も喜んでくれるだろう。「面接した事務長さんから、生き生きしていてとても良さそうな方ですねとお褒めの言葉があったぞ！」と伝えられたのも嬉しかった。小躍りして水郡線の下り列車に乗り、代行バスと奥武線を乗り継いで塩ノ沢温泉の駅に戻ったのは18時38分。「ナナ！私就職決まったよ！大田原の病院に行くことになったから、春からは6時41分の列車。毎朝もう少し長くナナといられるね！」犬小屋から少し出てきたナナは横たわってお腹を晒し薄目を開けながら、ナナのお腹を撫でるばかりかポンポン叩いている私の話を聞いているのかいなのか…ひとしきり撫でまわすとナナはふと起き上がり、フツとくしゃみをするすると真っ赤な舌を出して私の手を優しく舐めた。私はハッとした。それは、ナナがこれまでに滅多に見せたことのない仕草だった。「ナナ、おめでとうって言ってくれたのね！」私は両親に報告しなければとナナに手を振りながら踵を返すと駅前を去った。犬小屋にも戻らぬつづらな2つのまなこが駅頭でいつまでも私を追っているのには気づかずに。

枯田に吹く空っ風。国道を行き交うトラックの土埃。次の朝、駅前のタバコ屋にナナの姿はなかった。まだ寝ているのかな？と犬小屋を覗くと解かれた鎖が。お散歩？この時間に？毎朝起き出すのが遅いタバコ屋のおばあちゃん



がこの時間にナナを散歩に連れ出すことは考えづらかった。夕方すでに陽が落ち裸電球が待合室を照らす塩ノ沢温泉駅。学校から帰ってもまだナナはいなかった。もうタバコ屋は閉まっていたが、木戸を叩くとおばあちゃんが奥から出てくる。「ああ、優子ちゃん、ナナと遊びに来てくれたのね。ナナね…。昨日の夜、亡くなったのよ。8時ごろお夕飯をあげようとして出たら横になったまま動かなくなっているから慌てて獣医さんと呼んでね、でももう間に合わなかった。獣医さんによれば膀胱炎をこじらせたんじゃないかって言うんだけど。」思わず息が止まった。そうだ、お腹があたたかいのね、なんて言ったあの朝、ナナは熱を出していたのだろう。私は昨日の朝夕の一部始終をおばあちゃんに話した。おばあちゃんは目を細めた。「ナナは優子ちゃんが好きだったからねえ。あれじゃないのかい、優子ちゃんが就職決まったって聞いて、きっと自分の務めは終わったって、悟ったんじゃないかね。いつもナナの相手をしてくれて有難うね。この通り、私も足が悪くて満足に散歩にも連れて行けていなかったし。」

あれから1年が経った。霜の降りた庭先で私は中古で買った軽のドアを開けながら父に声をかけた。「じゃあ言ってくるね！今日は保険の計算の仕事で少し遅くなるかも！」エンジンをかけると、国道沿いにはあの日と同じように枯れた田が続き、トラックがせわしなく行き交っている。私は就職して間もなく運転免許を取り、結局はあっさり奥武線を使わなくなってしまった。大田原までは車で1時間弱もあれば着ける。七合での列車待ちもない。一度車を持ってしまうと再び列車通勤に戻るというのはかなり辛いものがある。だから、私の心の中の塩ノ沢温泉駅はあの日のままだ。駅を降りたら目の前のタバコ屋で尻尾を振るナナ。真っ白、というのも少々気が引けるうっすら茶色がかった体に仔犬の頃から変わらぬつづらな目を輝かせ、私の帰りを待っているナナ。タバコ屋のおばあちゃんも最近お話していないけれど元気かな。噂ではあれから朝と夕に常陸大子から大田原まで直通する列車なんていうのもできたというし、今度久々に列車にも乗ってみようかな。朝6時過ぎの駅前に行けば、きっとナナが待っている。そう、そこに姿かたちはなくとも、あの駅に行けばきっといつまでも、私の生い立ちを見届けて逝った私だけの”非公認”犬駅長が見守ってくれているに違いないのだ。